

感覚障害を呈した右人工股関節全置換術に対して歩行改善を目指した一症例

畠中琉生¹⁾西村慈覚¹⁾

1) 水無瀬病院 リハビリテーション部

Key words ; THA、頸髄損傷、感覚障害

【背景と目的】

今回、既往の頸髄損傷により両下肢に感覚障害を呈していた右人工股関節全置換術（以下 THA）後の症例を担当した。経過の中で感覚障害に対して触圧覚を意識した理学療法を用いたことにより歩容の改善に至ったため報告する。患者にはヘルシンキ宣言に従い、十分な説明を行い発表に関する同意を得た。

【症例と介入】

80歳代男性、X-26日まで頸髄損傷にて当院入院。両上下肢筋力低下、感覚障害が残存し屋内 SW 歩行にて自宅に一時退院。X-21日、右 THA 手術目的にて当院再入院。X 日右 THA を施行。術後、当院クリニカルパスに従い翌日より全荷重下で離床開始。

X+17 日目、NRS 安静時 1/10、動作時 3/10、荷重時 4/10。ROM-t (R° /L°) 股関節屈曲 90/100、伸展-10/0、外旋 30/40、内旋 10/30、膝関節伸展-10/-5、足関節背屈 0/5。MMT (R/L) 腸腰筋 3/5、大殿筋 3/3、中殿筋 2/3、大腿四頭筋 4/5。触覚 (R/L) 5/5。運動覚(R/L)7/7。10m 歩行テストは最大 0.78m/秒、TUG23.2 秒であった。歩行は右 Mst で股関節外旋位、重心移動不十分で、Mst~Tst で股関節伸展不十分であり前方への推進力低下を認め、また本人より「右足に体重が乗っていない、地面を捉えられていない」と訴えがあった。

X+22 日に両足底の触圧覚を意識させ、右下肢へ荷重を促すように裸足重心移動、歩行練習を実施したところ歩行時に右下肢へ重心移動が可能となった。さらに立脚後期で蹴り出しを認め客観的に歩容の変化を確認した。また「右足に体重が乗っている感じがする、足でしっかり蹴れている」と内省の変化も認めた。以降、同様の介入を通常の股関節機能訓練に合わせて継続した。

【経過および結果】

X+36 日目 NRS 安静時、動作時、荷重時 0/10。ROM-t (R° /L°) 股関節屈曲 95/110、伸展 0/5、外旋 30/40、内旋 10/30、膝関節伸展-10/-5、足関節背屈 0/5。MMT (R/L) 腸腰筋 4/5、大殿筋 3/3、中殿筋 3/4、大腿四頭筋 4/5。触覚 (R/L) 5/5。運動覚(R/L)7/7。10m 歩行テストは最大 0.84m/秒、TUG21.7 秒であった。歩行は右 Mst で重心移動が円滑となり Mst~Tst で股関節伸展および蹴り出しの向上、歩幅の増大を認めた。

【結論】

澳らによると、足底からの体性感覚情報は姿勢制御に対する貢献度が高く、足底から感覚入力を行いバランス能力、歩行能力の向上を認めたと報告されている。今回、感覚障害を呈していた THA 術後に対し触圧覚情報など、知覚を利用した重心移動、歩行練習を行ったことにより姿勢制御機能の再構築が図れ、歩容改善に寄与したと考える。